

ラグナー・ヌルクセ

『貿易と経済発展』一九五九年

逸見謙三

Ragnar Nurkse, *Patterns of Trade and Development*, Stockholm 1959, 68pp. は小冊子ながら、いくつかの点で注目されるが、その何れの点もがヌルクセの理論がわれわれの絶えず注目に値するものであるという事実と結びついている。ヌルクセは本書の完成後数日にして、勢力的にして影響力に富んだその一生を終った。本書はいわば遺作である。本書は三つの部分よりなる。最初の二つは一九五九年四月にストックホルムで彼が与えた二つの講演、「十九世紀世界貿易と二十世紀のそれとの対比」、「国際経済と経済成長の問題」を収録したものであり、第三の「貿易理論の動態的局面」は以上の二つの講義にふした理論的補充である。

書評 ラクナー・ヌルクセ『貿易と経済発展』一九五九年

注目に値する第一の点は、オーリンの流れに沿って国際資本移動論、貿易論を展開した著者の長年にわたる研鑽が本書で見事に開花し、独自の発展の理論を展開していることである。一言でいえばそれは成長の国際経済学である。

注目すべき第二の点は本書が極めて多くの歴史的事実によって構成されていることである。通常の実証的という意味ではなくて、歴史的事実の十分な認識の基礎の上に彼の発展理論が構成されているのである。例えばヌルクセの均衡成長 (Balanced growth) の理論はヴァイナーの国際分業に立脚した成長理論 (Jacob Viner, *International Trade and Economic Development*, 1953) と対比されるが、この対比は次の如くであろう。

ヌルクセは経済発展の三つのタイプを本書で指摘する。(i) 第一次商品の輸出による成長ないしは貿易を通じての成長、(ii) 製造消費財の輸出による成長ないしは輸出品市場のための工業化、(iii) 国内市場向け生産の拡大ないしは国内市場のための工業化の三つである。ここでは未開発国の経済発展のみを論じているのであるから、英米等の高度開発国の発展は与えられたものと仮定する。しかるとき一方に高度開発国が発展 (国際分業で工業国化) し、その刺激のもとに未開発国が発展 (国際分業で食糧ないし原料生産化) して行くのは第一のタイプである。この際

刺激とは食料ないし原料に対する増大する需要であり、その需要の増大が未開発国における投資機会を増加せしめる。そして実際の発展は新大陸に対する大量の人口および資本の移動によってなされる。

これは実態的には十九世紀的経済発展の型であり、この分析の理論として最良のものは、オーリン流のもの (Bertil Ohlin, *Interregional and International Trade*, 1933) またこの流れに沿う R. Nurkse, *Internationale Kapitalbewegungen*, 1935) またはウィクゼルの累積的過程 (cumulative process) である。

著者は本書の第一部でこのタイプの発展の可能性を徹底的に追求した。(ヌルクセの学究生活の初期はこの第一のタイプの発展の研究に集中せしめられたこと、前出の一九三五年の彼の業績が示す通りである。その後、他のタイプの発展があり、これが重要になっていることを発見した。それが明示的に見られるのは彼の著作たる *League of Nations, International Currency Experience*, 1944 である。その他のタイプ、特に第三のタイプの経済発展の理論を展開したのは彼の *Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries*, 1953 である。) 結論は否定的である。この否定はヴィイナー流の経済発展の処方箋の否定であり、一九五三年の著書における均衡成長の処方箋となつて現われた。これが本書における第三のタイプの経済発

展である。

第二、第三のタイプの経済発展は主として本書の第二部で追求されている。これは「輸出向けの第一次生産が経済の拡大にとって魅力的機会を提供しないときにおける、増大する労働力と資本とで何をなすべきか」(三五頁) という問題に発する。これは過去三〇カ年に非工業国の輸出 (石油を除く) は二五%増加しただけなのに、労働人口は約五〇%増加し、資本はそれ以上も増加したという事実 (三四頁) から出されてくる問題である。資本蓄積が不足し、それが中心的課題となっている現在、このような問題設定はおかしく響くかも知れない。しかしヌルクセは早くも四四年の著作で、この事実注目しているのである。(その第八章第三節では、一九三〇年代に到つて、未開発諸国が借款を伴うことなしに、国内の蓄積によって資本財を輸入し始めたことに注目している。又ハーシユマンの如き均衡成長論の否定者でも、未開発諸国が決して企業能力とか貯蓄に不足しているのではないという事実を認めている。) そして一九五三年の著作では経済発展において資本輸入よりも国内の蓄積を重視する立場の表明となっているのである。

かくて問題は非常に明瞭である。第一次生産物の生産国が、第一次生産物の輸出市場の拡大が望めないとき、増大する生産能力をもって何を生産するかという問題である。工業化以外に

途がないことは明らかであろう。工業化する場合に外国市場を頼りにするか、国内市場を頼りにするかという問題がある。前者は勿論程度の低い加工に限られるであろうが、それでも高度工業国側が国内の既存の衰退工業（ランカンシャヤーの綿業の如き）を調整することによって始めて可能となる。だから第二のタイプの経済発展、工業化の場合には先進の高度工業国側で古い軽工業から新しいタイプの重化学工業に資源を移動せしめることが義務づけられるのである。

このような外国の事情に全く依存することなしに工業化を達成しうるのが第三のタイプの国内市場向けの工業化である。しかしこの場合には国内に購買力を創出する必要がある。工業の発展のためには農業の発展が必要である。農業と工業との間に発展のバランスが必要である。又同じ意味において工業の内部でも種々の種類の工業の間に発展のバランスが必要である。いわば均衡成長が必要である。

現実の経済発展の場合には第一のタイプの可能性が最初に吟味されるべきであり（この可能性を否定しえない最良の事例たるものは石油産出国の経済発展で、これは文字通りの意味の十九世紀的パターンを追っている）、均衡成長の可能性は最後に吟味されるべきである。そして外部条件の如何に応じて、それぞれ比重を異にした組合せにおいて、三つのタイプが併用されるべき

である。

かくて注目されるべき第一、第二の点は明らかにされたと思う。注目されるべき第三の点は、貿易の理論という観点から第一の点と大巾に重複するが、著者独得の外国貿易の動態理論が展開されているという点である。言うまでもなく、それは第三部においてである。

(i) 比較生産費説に含まれる変化は一度限りのものであるが、ヌルクセの動態論は継続的変化ないしは変化の率を問題とする。例えば第一次生産物に対する外部からの需要の増加率と未開発諸国における生産資源の増加率との関係、ないしは両者の間のラグを問題とする。

(ii) 生産要因供給を独立変数とするか、従属変数とするかという点に関して、卓越した見解を展開している。

(iii) 既存の比較優位性 (established comparative advantage) と区別した意味での増加部分の比較優位性 (incremental comparative advantage) の概念の確立、およびその派生物である古典派の調整モデルの動態化と貧窮化成長 (immiserizing growth) 論の批判がある。

(iv) 国際収支、貿易条件および経済発展の相互間の関係に関する卓越せる見解がある。「短期において国際収支の問題ともなろうことが、中期においては貿易条件の問題となり、更に、

長期においては、経済発展の問題となる。」(六一頁)という言明は全く含むところの多い言明である。

個別にもいくつかの注目すべき点が含まれている。例えばハーシュマンの意味の不均衡成長論に対する批判(四三頁)、未開発諸国間における関税同盟の可能性(四五頁)等がある。しかしこれ等は余りに簡単に述べられており、多くの場合単なる示唆以上に出るものではない。

以上、いささか紹介に傾きすぎたが、本書において注目すべき点を指摘した。結論として、本書は、小冊子ながらも、ヌルクセの学問的生涯の集大成であり、国際経済学に対する記念すべき貢献である。このような重要な業績が、余りにも少ないスペースでなされたことは残念であるが、別の面からいえば、専門化以外にも読みうる分量と平易さで述べられたことは、学問の実用化という点から、幸である。ただ国際経済学の文献に余り通じていない読者は、相当の注意をもって読まないと真意をくみ取りがたいこともあろう。なお、A. K. Cairncross, *International Trade and Economic Development, in Kyklos*, Vol. XIII-1960-Fasc. 4 における克明な批判も参照されたい。